

# 2015 年度 東京大学 前期 国語

## 第一問 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	65分	池上哲司『傍らにあること―老いと介護の倫理学』（筑摩書房）からの出題。池上哲司は、現代のドイツ・英米の思想を中心に研究する倫理学者である。	本文の内容が具体的に読みやすかった2014年度に比べると、2015年度は「働き」「生成の運動」といった抽象的な言葉が本文中に多く用いられており、そもそも本文の内容を読み取るのに苦労した受験生も多かっただろう。 設問ごとに見ていくと、(一)と(二)は、どちらも根拠となる本文の記述は見つけやすい設問だが、(三)はその内容を解答にまとめるのがやや難しいものであった。(三)は指示語が何を指しているのかおさえ、傍線部前後の内容をまとめればよい設問だが、「足跡」という表現に対応するように解答を書くのに工夫が必要であった。(四)は(三)でおさえ「足跡」の内容を踏まえたくえで解答を作ることが要求されるものの、解答にはさほど苦労しないだろう。(五)は抽象度の高い内容をまとめ、さらに本文全体の論旨に沿うように解答を組み

### 傾向と対策

立てるところに難しさを感じただろう。(六)の漢字の書き取りは例年より少ない3問であったが、難易度は標準的なものであり、やはりここでの失点は避けたい。

### 解答

- (一) 実際に存在するのは現在の自分だけであり、過去の自分は身体的・意味的統合を通じてそれに回収されているのに、両者を別々のものとして立てることを前提としているから。(79字)
- (二) 自分の経験を意味づけ、自らの行為を通じて表現される過去への姿勢が新たに組み直されるのは、意のままにならない他者からの応答によってであるから。(70字)
- (三) 他人によって認められた自分らしさは、何か自分についての漠然としたイメージを現実化した具体的行為の痕跡に他ならないということ。(62字)
- (四) すでに死んでいる人の生前の具体的行為の痕跡を辿る人間には、行為者の死後もなお残る、その行為のもつ働きが感じ、悟られるということ。(64字)
- (五) 自分の生成が止まった死後でなお、他人に感得されるような働きを生じさせる自分の可能性を志向することは、それまでの自分の生成の運動において他人によって認められた固定的な自分らしさを否定し、そこから逸脱しようとする生成の方向性でもあるということ。(120字)
- (六) a 獲得 b 高潔 c 依然

## 本文解説

## 段落解説

## I 現在の自分と過去の自分(第1・第2段落)

「昨日机に向かっていた自分と現在机に向かっている自分、両者の関係はどうなっているのだろう」という問題提起から本文は始まる。しかし、昨日の自分と今日の自分との微妙な違いを認識できるのは、その違いにかかわらず成り立つ不変の自分があるからだという見方は、「出発点のところで誤っている」と筆者はいう。そのような見方は、生成する自分を「時間的に分断し、対比すること」で、「過去の自分と現在の自分を別々のものとして立て」ることを前提としているが、実際に存在するのは現在の自分だけなのである。運動能力や過去の経験を考えればわかるように、「過去の自分は、身体として意味として現在の自分の中に統合されて」いる。現在の自分は、その統合を通じて過去の自分を回収する。逆にいえば、「回収されて初めて、過去の自分は『現在の自分の過去』という資格を獲得できるのである」。

## II 生成の運動と自分らしさ(第3～第5段落)

過去の自分と現在の自分の統合は、意識されていない場合もある。したがって、現在の自分に回収された過去の自分が、常に認識されているとは限らない。とはいえ、過去のある出来事が記憶にないからといって、その時点の境に自分が断絶されているというわけではない。現在までのことをとぎれることなく記憶することは不可能であり、「重要なものは、何を忘れ、何を覚えていくかである」。それはつまり、「自分の出会ったさまざまな経験を、どのようなものとして引き受け、意味づけているか」ということである。自分の経験をどう意味づけるかという過去への姿勢を、現在の世界への姿勢として自らの行為で表現し、それに対する「他者からの応答によってその姿勢が新

たに組み直されること」が、「自分の生成」なのである。そしてその生成の運動において、「自分らしさというものも現れるのである」。

この生成の運動を「意識的に完全に制御できると考えてはならない」と筆者は言う。生成の運動は、自分の意のままにならない他者からの応答を介するものだからである。その生成の運動において現れる自分らしさも、他人によつて認められるものであり、自分で判断したり、意図して実現したりできるようにしたものではない。

自分の自分らしさは他人によつて認められるが、決定されるわけではない。不断に続く生成の運動から現れる自分らしさは、固定的に捉えられるものではない。それでも他人に自分らしさが認められるのは、「自分について他人が抱いていた漠然としたイメージを、一つの具体的行為として自分が現実化するから」なのである。しかし、生成の運動は不断に続いているのだから、自分らしさも変容し続けているはずである。ある時点である具体的行為から自分の自分らしさが認められても、その認められた自分らしさは、「生成する自分の残した足跡」、すなわちその具体的行為の「痕跡」でしかないのである。

## III 生成する自分の方向性(第6・第7段落)

他人に認められた自分らしさは、「生成する自分という運動を貫く特徴」ではありえず、「自分で自分の自分らしさを捉えることもできない」。ここで筆者は、「結局、生成する自分の方向性などというものはないのである」と新たな問題を提起する。

生成の方向性は生成のなかで自覚される以外にないが、それは自分についてのイメージが具体化されることで自覚されるわけではない。その時に自覚されるのはあくまでも生成の足跡、つまり自分が今までどのように生成して

きたかということではないのである。生成の方向性は、あるゴールへと向かう「棒のような方向性」ではない。自分についてのイメージからどれだけ自由になれるか、これまで生成し、他人に自分らしさを認められてきたこれまでの自分からどれだけ自由になれるか、そういった「虚への志向性」が生成する自分の可能性であり、生成の方向性なのである。

**IV 死後も残る生成の働き (第8〜第10段落)**

それまでの自分から逸脱する無数の可能性のうち、どれかが現実化されていくが、そのような生成の運動も「われわれの死によって終止符を打たれ」、自分が現実化した具体的行為の痕跡だけが残される。だが、「働きはまだ生き生きと活動して」おり、「ある人間の死によって、その足跡のもっている運動性も失われるわけではない」と筆者は言う。例えば、ソクラテスの問答を記録したものを私たちが読めば、私たちはソクラテスの行った問答という行為の働きをまざまざと感ずることができるのである。

このように、生成する自分は死んでいても、残された足跡、つまり具体的行為の痕跡からは働きを感じることができる。正確に言えば、私たちの働きは「徹頭徹尾他人との関係において成立し、他人によって引き出される」のだ。そして、死後も働きが可能であるような自分の可能性に向かうことは、〈Ⅲ〉で述べられていた、自分の生成の方向性でもあるのだ。

**百字要旨**

死後も他人に感得される働きを生むような自分の可能性を志向することは、他者からの応答により自らの過去への姿勢を組み替える自分の生成の運動における、それまでの自分から逸脱しようとする生成の方向性でもある。

(100字)

**用語解説**

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

**人格者** すぐれた人格の備わった人。

**高潔** 精神がけだかくいさぎよいこと。高尚で潔白なこと。

**真摯** まじめでひたむきなさま。

**逆説** ① 衆人の受容している通説、一般に真理と認められるものに反する説。

「貧しきものは幸いである。」の類。また、真理に反対しているようであるが、よく吟味すれば真理である説。「急がば回れ」「負けるが勝ち」の類。パラドックス。

**紛う**

- ① 入り乱れる。まざって区別がつかなくなる。
- ② 見分けにくいほどよく似ている。まちがえる。まごう。
- ③ 見誤ってわからなくなる。

**足跡**

- ① 歩いた後に残る足や履物のうらの形。あと。あしがた。
- ② 人の通った道筋。
- ③ 業績。そくせき。

**虚**

- ① 中身のないこと。事実でないこと。
- ② 二十八宿の一つ。とみてぼし。虚宿。

**志向** ① 心が一定の目標に向かって働くこと。「ころざし向かうこと。また、ころざし」。

**感得** ① 感じて会得すること。幽玄な道理などを悟り知ること。  
ものかに向かっていることをいう。

**徹頭徹尾** ② 心が神仏に通じて、願がかなうこと。  
始めから終りまで。どこまでも。おしとおして。あくまで。

## 設問解説

(一)

## 解答

実際に存在するのは現在の自分だけであり、過去の自分は身体的・意味的統合を通じてそれに回収されているのに、両者を別々のものとして立てることを前提としているから。(79字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I (第1・第2段落)

## 解説

傍線部の理由説明の問題であるが、傍線部中に「このような見方」という指示語があるので、まずこの指示内容をおさえる。第1段落2・3文目に、「身体的にも意味的にも、昨日の自分と現在の自分とが微妙に違っていることは確かである。しかし、その違いを認識できるのは、その違いにもかかわらず成立している不変の自分なるものがあるからではないのか。」とあり、それを受けて、「このようにいった発想は根強く、誘惑的でさえある。だが、このような見方は」と続く。ここから、傍線部中の「このような見方」は、「昨日の自分と現在の自分の違いを認識できるのは、不変の自分が存在するからだ」という見方」のことを指していることがわかる。

そこで、その「見方」が「出発点のところ」で誤っている「理由を本文から読み取っていく。」誤っている「という」からには、「誤っていない」、「すなわち「正しい」見方もあるわけである。このように考えると、「本当は〇〇なのに、これは××だから誤っている」という理由づけの構造が見えてくる。この問題でも、同じ構造に当てはめられないかという意識を持ちつつ本文を精読していこう。

傍線部の直後の一文を見ると、「われわれは過去の自分と現在の自分と

を別々のものとして立て、それから両者の同一性を考えるという道に迷い込んでしまう。」とある。「両者(＝過去の自分と現在の自分)の同一性を考える」ということは、すなわち時間が経過しても同一であり続ける、「不変の自分」を見出そうとすることである。ここから、「不変の自分」を見出そうとするとき、過去の自分と現在の自分を別々のものとして考えることが前提にあるということが読み取れる。さらに次の一文では、「あるのは、今働いている自分ただ一つである。生成しているところにしか自分はない」と述べられている。以上の内容を踏まえると、実際に存在するのは現在の自分だけであるのに、過去の自分と現在の自分を別々のものとして立てることが前提にあるから、「このような見方」は誤っているのだといえる。

現在の自分と過去の自分が別々にあるという誤った認識を前提としているからこそ、筆者は「このような見方は出発点のところから誤っている」というのである。

続く第2段落には、「過去の自分は、身体として意味として現在の自分のなかに統合されており」とあり、身体として統合される、意味として統合されるとはそれぞれどういうことか、運動能力や過去の経験を例に説明されている。そして6文目で再び、「現在の自分が身体的、意味的統合を通じて、結果として過去の自分を回収する。」とある。過去の自分が、身体的・意味的統合を通じて現在の自分のなかに回収されているからこそ、存在するのは現在の自分だけであるといえるのである。

以上の内容から解答をまとめると、「実際に存在するのは現在の自分だけであり、過去の自分は身体的・意味的統合を通じてそれに回収されているのに、両者を別々のものとして立てることを前提としているから。」となる。

## 《解答要素》

- ① 実際に存在するのは現在の自分だけである
- ② 過去の自分は身体的・意味的統合を通じて現在の自分に回収されている
- ③ にもかかわらず、現在の自分と過去の自分を別々のものとして立てることを前提としている

## 《参照箇所》

- ① 第1段落8文目
- ② 第2段落6文目
- ③ 第1段落6文目

## (二)

## 解答

自分の経験を意味づけ、自らの行為を通して表現される過去の姿勢が新たに組み直されるのは、意のままにならない他者からの応答によってであるから。(70字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 II (第3〜第5段落、特に第3段落)

## 解説

(一)と同様に、傍線部の理由説明の問題であるが、まずは傍線部中の「この運動」という指示語の指示内容をおさえる。傍線部より前の部分を見ると、第3段落9文目に「この生成の運動において」とあり、「この運動」とは「生成の運動」を指していることが読み取れる。したがってこの設問では、生成の運動が意識的に制御できない理由を説明するような解答を組み立てていく。

第3段落の内容をもう一度見直すと、生成の運動とは、「そのような過去

への姿勢(＝自分の経験をどう意味づけているのか)を、現在の世界への姿勢として自らの行為を通じて表現するということが、働きかけるということであり、他者からの応答によってその姿勢が新たに組み直されること」であると述べられている。簡潔に言えば、生成の運動は、他者からの応答によって行われるものである。

ここで、他者からの応答とはいったいどういうものであるか考える。本文にそのような記述はないが、一般的に考えて、「他者」というものは、自分の意思で思い通りに動かせるものではない。したがって、自分の意思で動かすことのできない他者からの応答というものも、自分の意のままにならないものであるといえる。意のままにならない他者からの応答を介するものであるから、「この運動(＝生成の運動)を意識的に完全に制御できると考えてはならない」といえるだろう。

ところで、傍線部の直後を見ると、「つまり、自分の自分らしさは、自らがそう判断すべき事柄ではないし、そうあると意図して実現できるものでもない。」と、「つまり」という接続詞から始まる一文がある。「つまり」という接続詞は、前の一文を言い換えた文章を続けるときに使われるものであるから、ここでも、傍線部と「自分の自分らしさは」という部分が同内容であると考えることもできる。しかし、第3段落9文目に、「この生成の運動において、いわゆる自分の自分らしさというものも現れる」とあるように、自分らしさは自分が意図して実現できない生成の運動において生まれるものである。すなわち、自分らしさと生成の運動は別のものであり、生成の運動についてのみ問われているこの設問では、自分らしさについての記述は解答に含めずに解答を組み立てる。

以上の内容から解答をまとめると、「自分の経験を意味づけ、自らの行為を通じて表現される過去の姿勢が新たに組み直されるのは、意のままにな

らない他者からの応答によってであるから。」となる。

《解答要素》

- ① 自らの行為を通じて表現される過去への姿勢
- ② ①の過去の姿勢は、自分の経験をどう意味づけているかという姿勢である
- ③ ①が組み直されるのは他者の応答によってである
- ④ ③の他者は、自分の意のままにならないものである

《参照箇所》

- ① 第3段落8文目
- ② 第3段落7文目
- ③ 第3段落8文目

(三)

**解答** 他人によって認められた自分らしさは、何か自分についての漠然としたイメージを現実化した具体的行為の痕跡に他ならないということ。

(62字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型+指示語説明型

解答範囲 II・III (第3～第7段落、特に第4～第6段落)

解説

傍線部に「その認められた自分らしさ」とあるので、まずはこの指示内容をおさえる。第5段落では、他人によって認められた自分らしさについて述べられており、傍線部を挟んで第6段落1文目には、「いわゆる他人に認められる自分らしさ」とある。したがって、「その認められた自分らしさ」と

は「他人に認められた自分らしさ」のことであるとわかる。

傍線部の構造を分析すると、「○○は、Aではなく、Bでしかない。」という形になっていることがわかる。「○○」で、筆者が重点を置いて述べているのは、「○○はBでしかない」という内容であり、「Aではなく」という部分は、「Bでしかない」という部分を強調するために用いられている。そのことを踏まえ、解答では、「○○はBでしかない」とはどういうことが説明することに重点を置く。

「Bでしかない」にあたる、「生成する自分の残した足跡でしかない」とはどういうことが考えていく。もう一度、「自分らしさ」というものがどういうものであったか確認すると、第3段落9文目、第4段落5文目、第5段落6文目にあるとおり、生成の運動において生まれ、他人によって認められるものの固定的に捉えることができないものことである。(第5段落6文目に「自分らしさは生成の運動なのだから」とあるが、筆者は第3段落9文目で「生成の運動において、いわゆる自分の自分らしさも現れる」と述べている。これらは一見矛盾しているように見えるが、第5段落6文目は「自分らしさは生成の運動(において現れるもの)なのだから」と文意を変えないまま解釈することができる。)

自分らしさは固定的に捉えることはできないが、第5段落7文目にあるように、「自分らしさが認められるというのは、自分について他人が抱いていた漠然としたイメージを、一つの具体的行為として現実化するから」であり、言い換えれば、他人はその具体的行為からある人の自分らしさを認めるのである。

今おさえた、「自分についてのイメージを現実化した具体的行為」という内容を、「足跡」という表現に対応するように説明するため、歩くという行為と足跡の関係を考えてみる。足跡は、ある人が歩いた後に地面に残るもの

であり、それは歩くという行為によって残された、その行為の「痕跡」である。これを傍線部の説明にも当てはめると、他人が認めた自分らしさは、ある具体的行為そのものではなく、その行為の「痕跡」であるといえる。第6段落1文目にもあるように、そのような「痕跡」は、時間が経っても変容することのない固定的なものであり、「生成する自分という運動を貫く特徴ではありえない」のである。

以上の内容から解答をまとめると、「他人によって認められた自分らしさは、何か自分についての漠然としたイメージを現実化した具体的行為の痕跡に他ならないということ。」となる。

#### 《解答要素》

- ① 他人に認められる自分らしさ
- ② ①は自分についての漠然としたイメージを現実化した具体的行為の痕跡ではない

#### 《参照箇所》

- ① 第6段落1文目
- ② 第5段落7文目

#### (四)

**解答** すでに死んでいる人の生前の具体的行為の痕跡を辿る人間には、行為者の死後もなお残る、その行為のもつ働きが感じ、悟られるということ。(64字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型+一般化型

解答範囲 IV (第8〜第10段落、特に第8・第9段落)

#### 解説

第8段落を見ると、自分の生成の運動は「死によって終止符を打たれ」、**「後には自分の足跡(＝具体的行為の痕跡)だけが残される」**のだという。しかし、筆者は「働きはまだ生き生きと活動している。」「ある人間の死によって、その足跡の持っている運動性も失われるわけではない」と述べている。この内容を踏まえた上で傍線部を考えると、「残された足跡」とは、すでに死んでいる人が残した具体的行為の痕跡のことであることがわかる。(三)の歩くという行為と足跡の関係をもう一度考えると、「その足の運び」は足跡のもととなった具体的行為を指し、「運動性」はその行為のもつ働きのことを指していることもわかる。

さらに傍線部直後の第9段落6文目の内容を一般化してみる。「ソクラテス」はすでに死んだ人のことであり、「問答」はソクラテスの残した具体的行為の痕跡のことである。後世の人間である「われわれ」がソクラテスの問答に直面することができるのも、その問答が文字という形で残されているからであり、それらはまさに、ソクラテスの「問答」という行為の「痕跡」である。そして、それに直面する「われわれ」には、「ソクラテスの力強い働き」、すなわち問答という行為の持つ運動性が、「まざまざと感じられる」のである。

以上の内容から解答をまとめると、「すでに死んでいる人の生前の具体的行為の痕跡を辿る人間には、行為者の死後もなお残る、その行為のもつ働きが感じ、悟られるということ。」となる。

#### 《解答要素》

- ① すでに死んだ人の具体的行為の痕跡を辿る人間
- ② ①には、行為のもつ働きが感じ、悟られる

③ ②の働きは、行為をした人間の死後も残るものである

※解答は「く」という「力(のこと)」というかたちで締めくくることが。

《参照箇所》

① 第9段落6文目

② 第9段落6文目

③ 第9段落4文目

(五)

**解答** 自分の生成が止まった死後でなお、他人に感得されるような働きを生

じさせる自分の可能性を志向することは、それまでの自分の生成の運動において他人によって認められた固定的な自分らしさを否定し、そこから逸脱しようとする生成の方向性でもあるということ。(120字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型+要旨把握型

解答範囲 Ⅲ・Ⅳ(第6～第10段落)

**解説**

まず傍線部中に、「この秘められた、可能性の自分」という指示語があることから、その指示内容を探すと、傍線部直前に「自分の可能性はなかば自分に秘められている」とあり、この部分を指していることがわかる。それでは、「自分の可能性」とはいったい何であろうか。もう一度、第10段落の内容を読み返してみる。「生成する自分は死んでいるが、その足跡は生きて」おり、その足跡から感じ取れる「われわれの働きは徹頭徹尾他人との関係において成立し、他人によって引き出される」のである。(四)でもおさえたように、生成の運動が終わった死後も、他人によって「足跡」から働きは引き出されるのであり、その可能性は「この現在生成している自分に含まれてい

るはず」だと筆者は述べている。以上の内容を踏まえると、ここでの「自分の可能性」とは、「自分の生成が止まった死後でもなお、他人に感得されるような働きを生む可能性」のことであるといえる。

傍線部では、その可能性を志向することが、「虚への志向性としての自分の方向性でもある」と述べられているが、この「虚への志向性としての自分の方向性」とはどのようなことだろうか。それについて述べられた部分を本文から探すと、第6段落末の「結局、生成する自分の方向性などというものはないのであるか」という問題提起から第7段落にかけて述べられていることがわかる。「生成の方向性は、く生成の可能性として自覚される」のであって、それは、「どれだけこれまでの自分を否定し、逸脱できるか」という「虚への志向性」なのである。「これまでの自分」とは、その時まで「自分なり、他人なりが抱く自分についてのイメージ」や、そのイメージを生成の運動の中で「具体的行為として自分が現実化」し、他人によって認められた自分らしさのことである。また、そのような他人によって認められる自分らしさは(三)でもみたように、「足跡」という固定的なものでしかない。そういった、固定的な「これまでの自分」を否定し、逸脱しようとするのが、「虚への志向性としての自分の方向性」なのである。

最後に、「本文全体の論旨を踏まえた上で」解答を組み立てる。本文全体を通して、「自分＝生成の運動」であることが前提となっており、第3段落で、その自分の生成の運動において、自分らしさが現れるということも、その後の議論では前提として扱われている。第6段落の「結局、生成する自分の方向性などというものはないのであるか」という問題提起に対して、傍線部は一つの結論を提示していることから、基本的にはその問題提起から結論までの内容が中心となるが、「自分とは生成の運動であること」、「生成の運動において自分らしさが現れること」の2点が前提にあるような解答を組み



立てなければならない。

最終的な解答は、「自分の生成が止まった死後でなお、他人に感得されるような働きを生じさせる自分の可能性を志向すること」は、それまでの自分の生成の運動において他人によって認められた固定的な自分らしさを否定し、そこから逸脱しようとする生成の方向性でもあるということ。」となる。

#### 《解答要素》

- ① 生成が終わった死後でもなお他人に感得されるような働きを生じさせる自分の可能性に向かうこと
- ② それまでの生成の運動において他人によって認められた自分を逸脱しようとする
- ③ ②は（虚への志向性としての）生成の方向性である
- ④ ①は③でもある

#### 《参照箇所》

- ① 第10段落4～6文目
- ② 第7段落6文目
- ③ 第7段落7文目
- ④ 第10段落7文目

(六)

**解答** a 獲得 b 高潔 c 依然

**難易度** ★★☆☆☆

**設問パターン** 知識・教養型

#### 解説

国語の試験が現在のように大問4つの構成となった2000年度から2

014年度まで、漢字の書き取りの問題は基本5問出題されていた(2011年度のみ4問)が、2015年度は3問の出題であった。

出題数は減ったものの、難易度としては標準的な問題であるため、(六)での失点は避けたい。漢字書き取り問題の対策として、日頃から自分の手で漢字を書く習慣をつけておこう。

(小島朋朗、千代田麻理、森岡桃子)

# 2015年度 東京大学 前期 国語

## 第二問 古文(作り物語)

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	30分	『夜の寢覚』からの出題。平安後期成立の物語で、作者は未詳であるが、菅原孝標女の作という説が有力である。2015年度は、これの二巻から出題された。『源氏物語』の影響を強く受けている作品の一つとして有名で、文学史においても度々言及される。	例年同様、本文はそれほど難解ではなかった。しかし東大古文で得点するためには、大雑把な読みではなく、精密な読解、出題者の意図に 대응することができるような解答作成が非常に大事である。また、解答欄が小さいため、必要な情報を取捨選択し、短くまとめる表現力も必要だ。東大二次試験形式の模擬問題や過去問を解いて演習を積み、読解に対する慎重な姿勢、何を問われているのか、出題者と対話する感覚を身につけていきたい。また、採点者に伝わりやすい解答が書けるようになるために、解答は第三者に添削してもらうことを推奨する。 設問形式は例年どおり小問が五問、現代語訳や心情・状況

傾向と対策
<p>把握の問題であった。(一)、(二)、(五)のように、比較的読みやすい文の現代語訳が土台となる問題は確実に得点したいところである。正確な文法学習や基本的な単語学習さえしていれば絶対に得点源となるこの手の問題は、東大入試でも毎年出題されている。日頃からこうした地道な学習を大切にしよう。</p> <p>2015年度の特徴は、(二)、(四)のような、和歌絡みの設問が多かったことだろう。時間内で和歌を正確に読み解答を作成しなければ合格答案を書くのは難しいため、苦戦した人も多かったのではないだろうか。東大の過去問に限らず、古文の勉強をしていて文章中に出てきた和歌を用いて、和歌特有の表現や、枕詞・掛詞など解釈に不可欠な修辞技法を読み解く練習をしておこう。</p> <p>最後に、どの設問にも共通することとして、設問をしつかり読む習慣をつけるようにしてほしい。東大古文の設問は短い(二)にもみられたように「必要な言葉を補って」「内容がよくわかるように」など細かい指示が含まれていることがあるし、「なぜか」「どういうことか」「現代語訳せよ」など、問われていることをはっきり意識することで、問題の取り違いなども防ぐことができる。問題文にも見落としがちな部分にラインを引いておくなど、些細な労力を惜しまないようしよう。</p>

### 《この解説の使い方》

**本文読解**「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のあ

る人が実際に本文を読むとき何を考えているか（「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分）や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど（「通読」の★部分）について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使いすぎる人は、この項目を見てみよう。

### 設問解説

設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは《合格答案》レベルの解答を、得意な人は《満点答案》を目指そう。

### 本文解説

「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識で作れる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

### 解答

- (一) ア 以前とは違って  
イ 仏道修行を中断して  
カ とても気の毒に見申し上げて
- (二) あなたは私に薄情だけれど、私はあなたに思いをさせていることだよ。
- (三) 女君の白い衣が、色とりどりの衣を重ね着するよりかえって趣深いということ。
- (四) 広沢での生活が心細く、姉との雪の日の思い出が残る都が懐かしくなってきたから。
- (五) あれこれ思い詰めていない様子を取り繕い、女君をさりげなく気遣う態度。

### 本文読解

#### 本文を読み始める前に

前書きに不要な情報はないので、長いと思っても一度すべて頭に入れてから本文を読もう。人物関係が細かく書かれているので、よく理解すること。図やメモ書きをしておく、混乱したときに便利かもしれない。

女君について、姉の夫である男君との子を出産し姉との仲に溝が生まれてしまったこと、父のいる広沢の地に身を寄せていること、男君からの連絡を拒んでいることをおさえよう。

また、東大古文は「注」のある箇所に印がないので、先に「注」にも目を通しておいたほうがよい。

### 通読

#### 第1段落第1行〜第2行「さすがに嬉くらざりけれ」

◎「注」から、「嬉捨山の月」は広沢の地で女君が見ている月のことだとわかる。

◎一つ目の和歌登場。「ありし」＝「以前」は、姉との関係も良好だった頃を指しているのだろう。その頃とは一転、現在女君はつらい生活を送っている。「すむ」は掛詞になっていて、「住む」と「澄む」の意味が掛けられている。大きく変わった自分の生活と、変わらない月の美しさを対比的に詠んだ歌と理解する。

#### 第2段落第1行〜第6行「そのままに〜したまふ。」

◎見慣れない表現が多い。「所からあはれまさり」は、場所の雰囲気と琴の音の趣深さがうまく調和している様子がイメージできればよさそう。「そのかされて」は、うまくのせられた、要はつられて演奏してしまったと

いうことだろう。

★「手」はよく「字」の意味で使われるが、ここでは珍しく、「曲・演奏法」の意(「手」を「技量」と解釈して、「技量を尽くして」と考えてもよい)。

◎女君の広沢での生活が垣間見える場面。心の傷も癒されつつあるようだ。

**第3段落第1行～第2行「つねよりもはいかにと」**

◎時雨のようなちよとしたことにつけても女君を思い出し、連絡を取りたいと思う大納言の様子がうかがえる歌。大納言はつらい気持ちを抱えながら女君のことを想っているらしい……と解釈するのは誤り。「つらし」は「薄情だ」という意味だったはず! 「つらし」なのは女君の方だ。

◎ここから大納言が絡んだ話に移るのかと思いきや、大納言とのやりとりの描写はこの二行で終了している。

**第4段落第1行～第3行「雪かき暮らしたまふ。」**

★「かきくらす(かき暗す)」は、空や心を暗くする様子を表現した動詞。「暮らす」という漢字があげられているのは、雪が一日中降ったことを反映しているのだろう。

★「あざる」は難単語で、「ある」「座る」と「さる」「移動する」からなり、「膝をついたまま移動する」という意味になる。

◎雪を見て、故郷の空まで閉ざされてしまったような心細い気持ちになる女君。白い着物を着て、端近くで物思いに沈んでいる。情景を想像するのはそれほど難しくない。

**第4段落第3行～第8行「ひととせ、くつまつる。」**

◎女君が姉と過した雪の日の思い出に浸っている。「かやうなりし」は、

今日と同じように雪が降っていたときのことを指す。

★「つくらせ」は、使役表現。高貴な女性たちは、側近以外に姿を見せることはほとんどなかった。「端」に出してしまうと姿が見られてしまう可能性があるがあるので、「端ちかく」までしか出て行くことができない。姉妹が雪山を作ることさえ自分たちの手では行わず、下女に作らせたということがこの「つくらせ」からわかる。

◎大納言の上は自分のことを思い出しもしてくれないだろうと涙を流す女君。「御前」とは女君の前のごことで、女君の心中を察した対の君の気遣いが行動に表れている。

**設問解説**

(一)

**解答**

**《合格答案》**

- ア 以前とは違って
- イ 仏道修行を中断して
- カ とても気の毒に見申し上げて

**《満点答案》**

- ア 以前とは違って
- イ 仏道修行を中断して
- カ とても気の毒に見申し上げて

難易度 ★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

**解説**

ア

◎ポイント

・ありしⅡ以前の

いかにも古文らしい表現。合格者の多くは、「ありし」が慣用表現で「以前の」の意であることをおさえていた。直訳「以前でもなく」から、《合格答案》を導く。

しかし、「ありし」の意味を知らなくても、「ありし」Ⅱラ変動詞「あり」の連用形＋過去の助動詞「き」の連体形と品詞分解さえできれば、《合格答案》を書くことができる。

これを踏まえると、傍線部は、「ありし」＋「にもあらず」、すなわち「以前の」様子ではなくなってしまっている、という状況を表現したものであるということになる。これをうまく訳出するという方法でもよい。

イ

◎ポイント

・行ひⅡ仏道修行

・さすⅡ中断する・やめる

「行ひ」は「仏道修行」、「さす（止す）」は「中断する・やめる」の意で、どちらも重要単語。

基本は単語知識で即答。傍線部の直後に、入道殿が女君のもとへ「わたりたまひたれば」Ⅱ「いらつしやつたので」という描写があるので、仏道修行をやめて女君のもとへ向かったという流れで文脈ともぴったり。

カ

◎ポイント

・心ぐるしⅡ気の毒だ・気がかりだ

対の君が、嘆き悲しむ女君を見て慰めようとする場面。「いと」は「とても」の意、「心ぐるし」は、相手に同情したり、他者を心配したりするときを使う表現で「気の毒だ・気がかりだ」という意味がある。あとは謙譲の補助動詞「たてまつる」を「しし申し上げる」と訳出するのを忘れないようにしよう。本番では、このレベルの知識をスムーズに出せるようにしたい。

(二)

解答

《合格答案》

私はつらいけれどあなたのもとに思いをはせていることだよ

《満点答案》

あなたは私に薄情だけれど、私はあなたに思いをはせていることだよ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

◎ポイント

・思いやるⅡ思いをはせる

・主語と目的語の補充

大納言が女君に向けて贈った歌である。本文中、女君と大納言とのやりとりについて書かれているのはこの和歌とその前行からなる二行のみという状況で、この和歌を正確に解釈するのは正直難しかった。

《合格答案》は、合格者の答案にも散見されるような、「つらし」の誤訳による典型的な誤答である。主語と目的語を補おうという意図は感じられるが、

「つらし」を「つらい」と誤訳してしまったために、これらを正しく判定できていない。

東大古文の現代語訳問題では、このように簡単に導き出せて、かつ意味が通ってしまうような誤答が用意されていることが往々にしてある。しかし、あまり簡単に答案が完成してしまった場合には、落としとしてポイントがなにか疑い深く考え直してみよう。出題者は可否を分けるような注目ポイント(本問では「つらし」!)を必ず用意している。

★ポイント

- ・ つらし⇨薄情だ・冷淡だ
- ・ 主語と目的語の補充

「ここからは《満点答案》の解説。まず注意すべきは、前述のとおり形容詞「つらし」の意味。「薄情だ・冷淡だ」の意味で用いられる。「思ひやる」は「思いをはせる」の意。「こ」までで、「薄情だけれど思いをはせていることだよ」という訳になる。

次にやるべきことは、設問の「必要な言葉を補」えという指示に従うことである。この手の問題は東大古文ではよく見かける。「必要な言葉を補って現代語訳せよ」という問題が出題されたときには、主語と目的語を補う習慣をつけよう。加えて、そのほかに補うべき言葉があるかは問題ごとに判断する必要があるのである。

というわけで、主語と目的語の判定を行う。前書きにあるように、女君が男君からの必死の連絡を拒絶しているという状況をおさえれば、「つらし」なのは女君、「思ひやる」のは大納言。すると「(女君は)薄情だけれど(大納言は)思いをはせていることだよ」となり、全体の意味が見えてくる。最後に、これが大納言が女君に向けて贈った歌であることを踏まえ、「女君」を「あなた」、「大納言」を「私」に置き換える。

(三)

解答

《合格答案》

女君の白い衣が、色とりどりの衣よりかえって趣深いということ。

《満点答案》

女君の白い衣が、色とりどりの衣を重ね着するよりかえって趣深いということ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

◎ポイント

- ・ なかなか⇨かえって
- ・ いろいろなり⇨色とりどりだ

まず、出題者が問いたいのはおそらく、副詞「なかなか」を「かえって」と正しく訳せるかということだろう、と考える。これと、「よりも」という表現から、「白き御衣」と「いろいろならむ(御衣)」が比較されていそうだとわかる。ということは、形容動詞「いろいろなり」は「色とりどりだ」ぐらいの意味だろう。答案にはこの対比を盛り込んだ方がよさそうだ。このように思考を展開させれば《合格答案》が書ける。「なかなか」は頻出単語なので確実に覚えよう。

雪景色に「いろいろならむ御衣」⇨「色とりどりの着物」ではなく、あえて「白き御衣」⇨「白い着物」を合わせる女君のセンスが評価されているというわけだ。また、傍線部直前の「あまた」に注目し、女君は着物を「たくさん」重ね着しているということに気づいたならば、これを補うとよいだろう。

(四)

解答

《合格答案》

雪の日に、かつて姉と都で過ごした思い出が蘇り懐かしくなったから。

《満点答案》

広沢での暮らしが心細く、姉との雪の日の思い出が残る都が懐かしくなっ  
たから。

難易度 ★★★★★

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

◎ポイント

・掛詞「ふる」

・理由① 都で姉と過ごした思い出

傍線部「雪ふるさとはなほぞこひしき」の「ふる」は「降る」と「ふるさ  
と」の掛詞になっている。「こ」での「ふるさ」とは、「なじみの土地・我が  
家」の意味であり、「なほ」を「やはり」と訳すと「雪の降るかつての我が  
家がやはり恋しい」という解釈になる。そして、問われているのはこの部分  
の心情の理由である。

では、女君が都を恋しく思うきっかけとなったのは何であろうか。「こ」で、  
「ひととせ」思しいづるに「こ」の部分に、かつて姉と雪の日に過ごした思い出  
が描写されていることに注目しよう。女君は目の前で降る雪を見て、姉と仲  
むつまじく過ごしていた日々を思い出したのだろう。

★ポイント

・掛詞「あらし」

・前書きの参照

・理由② 広沢の暮らしの心細さ

《合格答案》でもある程度の説得力はあるが、もう一步発展して、ほかの  
受験生と差のつく答案を作ることはできないかと考えてみよう。そこで、和  
歌前半に注目。

「あらし」は「あらし」と「嵐」の掛詞になっている。「思ひいではあら  
じ」とは、女君は都にはよい思い出がない、ということの意味している。直  
前で姉と過ごした日々を思い出しているじゃないかと突っ込みたくもなる  
が、女君はきつと思いついて出なななと思いたくなるほどに都でつらい経験を  
したのだろう、と察してあげよう。「嵐の山になぐさまで」は、女君の心の  
傷が「嵐の山」においても癒えないということを意味している。ここで前書  
きに注目。「広沢の地(平安京の西で、嵐山にも近い)」とある。つまり、「嵐  
の山」とは、女君が現在暮らす広沢の地を指しているというわけだ。

これらのことから、女君が広沢の地でも心が癒えず心細い気持ちでいるこ  
とも、都を恋しく思った理由として挙げられそうだ。広沢に対するネガティ  
ブな気持ち(＝心細い暮らし)と、都に対するポジティブな気持ち(＝姉と  
過ごした雪の日の楽しい思い出)を、都に気持ちが向かう理由としてまとめ  
れば、盤石な解答ができる。

(五)

解答

《合格答案》

あれこれと気にかけていないかのような様子で振る舞う態度。

《満点答案》

あれこれと思いつめていない様子を取り繕い、女君をさりげなく気遣う態  
度。

難易度 ★★☆☆

設問パターン 内容説明(一般化型)

解説

◎ポイント

・「よろず思ひ入れず顔」の解釈

・もてなす＝振る舞う

対の君の態度を説明するには、まず場面の状況把握をしておいた方がよい。ここは、女君の母親代わりにあたる対の君が、悩み苦しむ女君の様子を見て慰めようとする場面であることを踏まえたうえで解釈していこう。

まず、「もてなす」が「振る舞う」の意味であることは必須知識で、このことから、対の君がどのように振る舞ったのかという部分が、設問で問われている「態度」に対応してくる。

「よろづ思ひ入れず顔」は、現在でも使われる「何食わぬ顔」という表現が連想できるという意味がつかみやすいだろう。「よろづ」とは、今までの女君のつらい経験から、それを受けて思い悩む女君が現在置かれている状況まで、文字通り、「万」の、さまざまな事柄を指している。そしてそれを「思ひ入れず」とは、そうした女君の苦境を気にしないようにする、ということ在意味しており、以上をまとめて、《合格答案》となる。

★ポイント

・対の君の心情

もう少しだけ深く読んでみよう。母親代わりである対の君が、娘のように世話をしてきた女君の苦しむ様子を目にしたとき、どのように接するのがふさわしいだろうか。傍線部からは、過度に気を遣うような素振りを見せずに、普段どおり接するという態度をとった、対の君の真の気遣いがうかがわれる。こうした思考を通じて、より洗練された解答を作ることができる。

本文解説

現代語訳

そうはいってもやはり、姨捨山の月は、夜が更けるにつれてますます澄んでいくのを、(女君は)素晴らしいとつくづく眺めやりなさって、物思いにふけていらつしやる。

ありしにも……(私は以前とは違ってつらいこの世に住んでいるが、澄んでいる月の光は以前京都で見たのと変わらないことだなあ)

久しくそのままにして、手に取っていらつしやらなかった箏の琴を引き寄せなさって、弾き鳴らしなされると、その場所と相まっていっそう趣深く、松風もちょうどうまい具合に吹くので、それにつられて、しみじみと趣深くお思ひになるままに、聞く人もいないだろうとお思ひになると気も楽で、あらゆる曲をお弾きになっていると、入道殿が、仏前にいらつしやしたが、それをお聞きになって、「なんと趣深く、言葉では言い表せないほどの御琴の音色だなあ」と、(音色の)美しさに、聴き入るあまり、仏道修行を中断していらつしやだったので、(女君が)弾くのをやめなさってしまったのを、「引き続き演奏をお楽しみなさい。念仏しておりますと、『極楽からの迎えが近いのだろうか』と、心が自然ときめいて、尋ねて参ったのだよ」と言って、少将に和琴をお与えになり、琴を合奏するなどしなさって楽しんでいらつしやるうちに、あつけなく夜が明けてしまった。このようにして(女君は)心を慰めながら、毎日暮らしていらつしやる。

いつもよりも時雨が降り続いた早朝、大納言から、

つらけれど……(あなたは薄情だけれど私は思いをはせていることだ

よ、山里の夜の時雨の音はどのように聞こえるのだろうか)

雪が一日中空を暗くした日、思い出のない我が家の空までも、閉ざされた心



地がして、やはり心細いので、部屋の端近くまで膝をついたまま出て行って、白い御着物を何枚も、鮮やかな色のものを重ねるよりもかえって風情があり、親しみ深い様子で着ていらっしやって、物思いに沈みながら暮らさなされる。以前、このようになったとき(雪が降ったとき)に、大納言の上と部屋の端近くで、雪山を(下女)に作らせて見ていたことなど、思い出すと、いつもよりも流れる涙を、かわいらしく拭い隠して、

「思ひいでは……(思い出もないけれど、嵐山でも心が癒されないので、

雪の降るかつての我が家がやはり恋しいことです)

(大納言の上は)「私のことを、このようには思い出しなさらないだろうよ」と、推測するのでさえ涙を止めがたいのを、対の君はとても気の毒に見申し上げて、「お気の毒に、今まで物思いに沈んでいらっしやったのですね。(女君の)御前にみなさん参上しなされ」などと、何も気にしていないかのような様子で振る舞い、(女君を)慰めなされる。

### 用語解説

さすがに そうはいってもやはり

めづらし 素晴らし

ながむ【眺む】「目マノ二」 物思いにふける

うし【憂し】 じつじ

かけ【影】 ①光②姿

あはれ 趣・情緒

て【手】 ①字・筆跡②曲・演奏法

おこなふ【行ふ】「目ハ四」 仏道修行をする・勤行する

さす【止す】「他サ四」 中断する

あそばす【遊ばす】「他サ四」 詩歌管弦の遊びをなさる

はかなし ①頼りない②ちょっとした

つらし 薄情だ・冷淡だ

はし【端】 部屋の外に近いところ・縁側

なかなか かえって・むしろ

をかし 素晴らしい・風流だ

らうたし かわいらしい

(松田朋佳、市川裕圭、上岡公聖)

# 2015 年度 東京大学 前期 国語

## 第三問 漢文（清代の逸話）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	20分	『閩微草堂筆記』は紀昀が集めた奇談怪談で、『灤陽消夏録』『如是我聞』『槐西雜志』『姑妄聽之』『灤陽統録』からなる。乾隆54年（1789年）から嘉慶3年（1798年）にかけて書かれたものを、門人（弟子）の盛時彦が合刊した。今回出題された文章は『槐西雜志』に収められた逸話である。	本文は約200字。二つの段落から構成されている。前半では高西園の不思議な体験について、後半では晩年の高西園について述べられている。複雑な内容ではなく、全体的に読みやすい文章だった。しかし、やや遠回しでわかりにくい表現があるため、重要な部分の意味がわからず歯がゆい思いをしたかもしれない。 設問の(一)は、高西園の夢の内容を理解することと、「祥」の意味の解釈がポイントとなる。漢文では、夢の内容が現実

### 傾向と対策

世界での出来事と関連づけて語られる場合が多いということと覚えておいてほしい。(二)は空欄補充の問題である。過去3年間はこのような出題形式はなかったが、2009年と2011年には漢詩の空欄補充、2005と2007年には地の文の空欄補充が出題されているので確認してみるとよい。(三)は指示内容を答える問題で、傍線部直後の内容をそのまま書けばよい。(四)と(五)は比較的やさしい問題なので必ず正解したい。(四)は二つの「爾」の読み方が異なるので戸惑うかもしれないが、文脈を頼りに現代語訳したい。(五)は傍線部も設問もあっさりしているだけに、文脈を深く理解して丁寧に解答を作成することが大切である。特に「先輩」と「追」の訳に注意。直前部分をよく読み、より適当な表現を心がけよう。

### 《この解説の使い方》

#### 本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

#### 設問解説

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

#### 本文解説

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間

がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名（作品名を書き下す場合を除く）のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

**解答**

- (一) 高西園は司馬相如（と名乗る人）が訪ねてくる夢を見たが、それが何の前兆であるかわからなかった。
- (二) 不
- (三) 司馬相如の玉印と高西園自身の妻。
- (四) いったい誰があなたの物を奪ったりするだろうか、いやどんな愚か者でもそんなことはしない。
- (五) 高西園は最近の士大夫ながら、昔の士大夫に比肩するほどの詩や書画の才と優れた気質をもっていた。

**本文読解**

**通読**

高西園嘗て一客の来り謁し、名刺に「司馬相如と為すを夢む。

◎ 序文から高西園は清代の人、「注」から司馬相如は前漢の人だとわかる。  
高西園は夢の中で二千年近くも昔の人に会ったらしい。

驚き怪みて寤むるも、何の祥なるかを悟る莫し。

▼ 高西園は驚いて目覚めたが、何の「祥」であるか悟ることがなかった。

◎ いかにも意味がありそうな夢だ。何かのお告げだったのかな？

越ゆること数日、意無くして司馬相如の一玉印を得たり。

◎ 玉印とはなんだろう？ 書とか絵に押す印鑑みたいなものかなあ。

▼ 数日後、高西園は意図せずして司馬相如の一つの玉印を手に入れた。

◎ 高西園が夢の中で司馬相如に会ったのは、数日後に司馬相如の玉印を手に入れることの前兆だったらしい。つまり傍線部 a の「祥」は、「前兆」というような意味だろう。

古沢斑駁、篆法精妙、真に昆吾刀の刻なり。

◎ よくわからないけど素晴らしい印鑑なんだね。

恒に之を佩びて身より去らず、至つて親昵なる者に非ざれば、**b**能一見。

◎ 「至つて」は現代語と同じ用法らしい。「親昵」の「昵」を含む熟語とい

えば「昵懇」が思い浮かぶ。「親昵」も「親しい者」という意味だろう。

「b 能一見」の意味を文脈から想像しよう。「すごい玉印を手に入れた。

いつも大切にされていて、非常に親しい相手でなければ、(盗まれたり傷をつけられたりするのを恐れて)見せなかった」と続くのが自然だろう。

b には打消の意味の言葉が入りそう。

▼ 高西園はいつもこの玉印を肌身離さずもっていて、非常に親しい人でなければ、(玉印を)見られなかった。

塩場に官たりし時、徳州の盧文兩淮運使たり、

▼ 高西園が製塩場の役人だったとき、徳州の盧文は塩を運ぶ役人だった。

◎ 場面が変わった。

是の印有るを聞き、燕見せし時、偶之を親んことを索む。

◎「是の印」はさつき出てきた玉印のことかな。「注」より、「燕」は「宴」の意で使われているらしい。

☆「宴」と「燕」は読みが同じであるため、「燕」の音を借りて「宴」の意味で用いている。

▼高西園がこの玉印を所有していると聞いて、宴の会場で会ったとき、盧丈は高西園にこれ（＝玉印）を見せてほしいと頼んだ。

西園席を離れ半ば跪き、色を正し啓して曰はく、

◎高西園は席を離れて半分ひざまずき、盧丈に何か言っている。「色を正す」という語は聞いたことがないけど、なんとなく改まった感じがする。「啓す」は古文でたまに見るなあ。謙譲語が使われているから、盧丈は高西園より上の身分のようだ。

「鳳翰一生客を結び、有する所は皆朋友と共にすべし。其の共にすべからざる者は、惟だ二物のみ、此の印及び山妻なり」と。

◎高西園のセリフ。「鳳翰」とは？ 「注」にも載っていない……と思いきや、序文に説明があった。「鳳翰＝高西園」ということか。

▼「私は人と友達になったら、持っているものはみんな友達と共有するべきだ。共有できないものは、ただ二つだけで、この玉印と妻だけだ」と。

盧丈笑ひ之を遣りて曰はく、「誰か爾の物を奪ふ者ぞ、何の痴か乃ち爾せんや」と。

◎一個目の「爾」は「なんぢ」、二個目はなんだろう？ とにかく盧丈は

高西園の玉印を奪い取りはしなかったようだ。

西園画品絶高、晩に末疾を得て、右臂偏枯するも、乃ち左臂を以て揮毫す。

◎晩年四肢の疾患にかかったらしい。「臂」は「八面六臂」の「臂」だから腕。右手が使えなくなったから左手で書いたのね。

生硬倔强なりと雖も、乃ち弥別趣有り。詩格も亦た脱灑たり。

◎たぶん「高西園の書画と詩は素晴らしい！」って褒めてるんだろう。

跡を微官に托すと雖も、蹉跎として以て歿す。

◎死んでしまった。「微官」には「注」がついていないけど、「微細」や「微々たり」の「微」だから「しょぼい官職」くらいの意味だろうか。出世はしなかったらしい。

近時士大夫の間に在りても、猶ほ能く前輩の風流を追ふなり。

◎よくわからん。まあ高西園は清代の人だし、第1段落で前漢の司馬相如が出てきたし、「西園は最近の士大夫の中でも、やはり昔の風流（＝昔の素晴らしい書画家である司馬相如の風流）に追隨できる人だった」的な感じかな？

設問解説

(一)

解答 高西園は司馬相如（と名乗る人）が訪ねてくる夢を見たが、それが何

の前兆であるかわからなかった。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

高西園が夢から覚めた場面。一行半なので、40〜50字ほどで書きたい。まずは問題文を読み解き、書くべき内容を考えよう。

①「その直前に高西園が経験したことを明らかにして」

↓高西園が見た夢の内容を説明する

②「莫悟何祥」をわかりやすく説明せよ」

↓直訳ではわかりづらい部分を補充・意識しつつ「莫悟何祥」を現代語訳する  
すると、解答の形は、

「高西園は【①夢の内容】という夢を見たが、【②莫悟何祥の現代語訳】となる。

①夢の内容は、傍線部の前の部分から「司馬相如（と名乗る人）が訪ねてきた」である。

②「莫悟何祥」を直訳すると「何の祥かわからなかった」となるが、これでは意味がわかりにくいいため、「祥」をもっとわかりやすい表現に変えたい。

「祥」の意味を考えながら、傍線部のあとの部分を読んでみよう。高西園は不思議な夢を見た数日後に司馬相如の素晴らしい玉印を偶然手に入れている。このことから、「祥」は「兆し」「前兆」のような意味で用いられていると推測できる。よってこの夢は、高西園が近いうちに司馬相如の玉印を手に入れる「前兆」であったことがわかる。

(二)

解答 不

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 空欄補充

解説

高西園は司馬相如の玉印を非常に大切にし、肌身離さず身につけていたらしい（恒佩之不去身）。それほど大切な玉印なのだから、破損や盗難を恐れるのは当然である。よって「非至親昵者〓大変親しい相手でなければ」のあとは「見せてもらえなかった」と続くのが自然。よって、**[b]**には「能」を打ち消す文字が入ると推測できる。

問題文には「**[b]**に入る文字を文中から抜き出せ」と書いてあるから、念のため本文中に「不」があることを確認したうえで解答しよう。

(三)

解答 司馬相如の玉印と高西園自身の妻。

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 語句の抜き出し

解説

傍線部の訳は「共有できないもの」「したくないもの」となる。この文が指し示す対象は二つだけで（唯二物）、その具体的な内容は「此印（〓司馬相如の玉印）及山妻（〓高西園自身の妻）」である。

(四)

解答 いったい誰があなたの物を奪ったりするだろうか、いやどんな愚か者

でもそんなことはしない。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

## 解説

問題文の指示は「傍線部dをわかりやすく現代語訳することだから、直訳ではわかりづらい部分を補充・意識しつつ現代語訳せねばならない。

まずは「誰奪爾物者、何痴乃爾耶」を直訳してみよう。試しに「痴」を「愚行」、二つの「爾」を「あなた」として訳すと、次のようになる。

「誰があなたの物を奪うだろうか、いや誰も奪いはしない。一体どんな愚行をあなたはするだろうか、いやしない」

ここで、何かがおかしいことに気づいてほしい。前半部分はよいとして、後半部分に違和感を覚えまいだろうか。

後半部分の直すべき点は二つ。まず、二つ目の「爾」は「なんぢ」ではなく「しか」と読む。指示語「しか」が指す具体的な内容は「盧丈が高西園の物を奪うこと」である。ただし、解答を書く際には「しか」の内容を書く必要はない。指示語のままでも十分に文章の意味は通るうえ、字数制限が厳しいためである。

そしてもう一つ、ここでの「痴」は「愚行」ではなく「愚か者」と解釈するのがよい。以上の二点を直すと「痴(＝愚か者が)＋爾(＝そうする)」となり、主語と述語がうまく対応する。

よって暫定的な答えは「いったい誰があなたの物を奪うだろうか、いや誰もそんなことはしない、いったいどんな愚か者がそんなことをするだろうか、いやどんな愚か者でもそんなことはしない。(77字)」となる。先ほどの誤訳より自然な訳になったのではないだろうか。ただし解答欄は一行半なので、枠内に収めるためには反語を一部省略して45～50字程度に収める必要がある。

## 五

**解答** 高西園は最近の士大夫ながら、昔の士大夫に比肩するほどの詩や書画

の才と優れた気質をもっていた。

**難易度** ★★☆☆☆

**設問パターン** 現代語訳

## 解説

問題文に「傍線部eを主語を補ってわかりやすく現代語訳せよ」とあるので、まずは傍線部の主語を考えてみよう。

第2段落では高西園の作風や生涯について述べており、この文の主語も高西園である可能性が高い。

次に「猶能追前輩風流也」を直訳しようとすると、

「(高西園は)なお(↑やはり?) それでも(↓)よく(↑)できる? 上手に(↓)先輩(↑誰?)の風流(↑趣? 情緒?)」

というように、多くの疑問が出てきてしまう。本文全体の内容を踏まえて傍線部の意味を読み解いていこう。

まずは第2段落から、高西園という人物の特徴を読み取ろう。

「西園画品絶高、晩に末疾を得て、右臂偏枯するも、乃ち左臂を以て揮毫す。生硬倔強なりと雖も、乃ち弥別趣有り。(＝高西園の画は素晴らしいものだったが、晩年に利き腕を病んでしまった。それでも利き手ではないほうの腕を使って書き続けた)」…この二文からは、彼の卓越した画才と、画を描くことに対する不屈の執念を読み取れる。

「詩格も亦た脱灑たり(＝詩の作風もまた洗練されていた)」…この部分からは、高西園は画才だけでなく詩作の才能ももっていたことがわかる。

「跡を微官に托すと雖も、蹉跎として以て歿す。」…この一文からは、官吏としては出世せず、目指していた地位を得ることはできなかったという不遇な一面を読み取れる。

よって、第2段落からは次のような高西園のイメージを読み取れる。

- ①画においても詩においても一流の才能をもつ、文化人の鑑のような人物  
②困難に直面しても、くじけずに創作活動を続けようとする強い意志と気概をもつ

高西園のイメージがつかめたところで、傍線部の訳に取り掛かる。わかりやすい部分から意味を推測していくとよい。

「先輩」は「近時士大夫（＝最近の士大夫）」と対比されている。よって「先輩」は「昔の士大夫」と推測できる。

「追」は「追いつく」という意味。「能く追フ」は「追いつくことができる」と及ぶ・匹敵する」と訳せる。

「風流」を「書画の趣」という意味で解釈した人もいるだろう。その読みは正しいが、少し足りない要素がある。ここでいう「風流」とは「遺風」のことであり（『広辞苑 第六版』で「風流」を引くと「遺風」という意味がちゃんと載っている）、文才だけでなく精神面も含めた彼の長所を指しているのである。先に述べたように、第2段落には高西園の性格をうかがわせる描写があった。さらに第1段落の内容を思い出してほしい。高西園は、上司の頼みをつねてまで大切な玉印を守ろうとした（盧丈は玉印を奪う気などなかったらしく、やりすぎの感も拭えないが……）。この場面からは、相手が上司であろうと臆せずへつらわず、譲れない一線を守ろうとする高西園の気概が読み取れる。つまり傍線部の「風流」には、高西園の書画の才能と、気骨ある人物像という二つの要素が含まれているのである。「風流」に「遺風」の意味があることを知らずとも、第1段落の内容も鑑みて、「風流」が高西園の才能だけでなく精神面に対する評価も含んでいることを読み取ってほしい。

ここまでの内容を踏まえると「猶」が逆接であることがわかり、「猶」の

前後の内容を逆接でつないだものが最終的な答えになる。

### 本文解説

第1段落① 高西園、司馬相如の玉印を得る（3行目「不能一見。」）

#### 書き下し

高西園嘗て一客の来り謁し、名刺に司馬相如と為すを夢む。驚き怪みて寤むるも、何の祥なるかを悟る莫し。越ゆること数日、意無くして司馬相如の一玉印を得たり。古沢斑駁、篆法精妙、真に昆吾刀の刻なり。恒に之を佩びて身より去らず、至つて親昵なる者に非ざれば、一見する能はず。

#### 現代語訳

高西園は以前、「一人の客人が自分に会いに来て、（その客人がくれた）名刺には司馬相如と書いてある」という夢を見た。高西園は（夢の内容について）驚き不思議に思つて目が覚めたが、（この夢が）何の前兆であるのかわからなかった。それから数日後、偶然にも司馬相如の玉印を手に入れた。（その玉印には）歳月を重ねた光沢とまだら模様があり、篆書で書かれた文字はたいへん素晴らしく、非常に切れ味の鋭い刃物で彫られた印であった。（高西園は）いつもこの玉印を肌身離さず身に付けており、非常に親密な人間でなければ、（その玉印を）少しも見ることができなかった。

第1段落② 高西園、盧丈の頼みを断る（3行目「官塩場時」）

#### 書き下し

塩場に官たりし時、徳州の盧丈、兩淮運使たり、是の印有るを聞き、燕見せし時、偶之を親んことを素む。西園席を離れ半ば跪き、

いろを正し啓して曰はく、「鳳翰一生客を結び、有する所は皆朋友と  
共にすべし、其の共にすべからざる者は、惟だ二物のみ、此の印及び山妻  
なり」と。盧丈笑ひ之を遣りて曰はく、「誰か爾の物を奪ふ者ぞ、何  
の痴か乃ち爾せんや」と。

### 現代語訳

(高西園が) 製塩場の役人であったとき、徳州の盧丈が兩淮運使であり、  
(盧丈は) この玉印のことを聞きつけて、宴の席で高西園と会ったとき、ふ  
と玉印を見たいと言った。西園は席を離れて(盧丈の席のそばまで行き) 半  
ばひざまずき、真剣な顔つきになって申し上げて言った、「わたくし鳳翰は、  
この一生において親交を結べば、所有するものはすべて友と共有しようと思  
っておりますが、共有できないものが二つだけあります、(それは) この玉  
印と拙妻です」と。盧丈は笑って高西園を席に戻らせて言った、「いったい  
誰がおまえの物(玉印)を奪うだろうか(いや誰もそんなことはしない)。  
いったいどんな愚か者がそのようなこと(玉印を奪うこと)をするだろう  
か(いやどんな愚か者でもするまい)」と。

### 第2段落 高西園の優れた才能と気風

#### 書を下し

西園画品絶高、晩に末疾を得て、右臂偏枯するも、乃ち左臂をもつ  
て揮毫す。生硬倔強なりと雖も、乃ち弥別趣有り。詩格も亦た脱灑  
たり。跡を微官に托すと雖も、蹉跎として以て歿す。近時士大夫の間  
に在りても、猶ほ能く前輩の風流を追ふなり。

#### 現代語訳

高西園の画はこの上なく素晴らしかった。晩年に四肢の病気を患い、右腕  
が枯れたように痩せてしまった(玉印不随になった)ものの、それからは左腕

を使って書いた。(利き手でないほうの腕で書いたため)ぎこちなく力のこ  
もった筆致ではあったが、ますます格別の趣があった。詩の風格もまた洒脱  
にして流麗であった。下級の官職に就いたものの、志を遂げられないまま亡  
くなった。近頃の士大夫の中にいながら、それでも古人に比肩するほどの詩  
や書画の才とすぐれた気骨をもっていたのだ。

### 要旨

高西園は司馬相如が訪ねてくる夢を見た数日後に、偶然司馬相如の素晴ら  
しい印を手に入れた。それを大切にし、上司の盧丈に頼まれても見せなかつ  
た。高西園は晩年に至るまで、昔の士大夫に比肩するほどの優れた気質と書  
画の才をもっていた。(111字)

#### 【参考】教養人としての士大夫／文人士大夫と山水画

##### 教養人としての士大夫

北宋(960年～1127年)以降、士大夫とよばれる新たな  
支配階級が台頭した。士大夫は科挙に合格した上級官僚としての  
政治的影響力と、新興地主としての経済力を兼ね備え、さらに儒  
教的教養を身につけた文人(詩や書画に親しむ人)としての側面  
ももっていた。詩作・書道・絵画の三つに通じていること(詩  
書画三絶)は文人の理想であり、そのため彼らは余技(専門以外  
の技芸)として詩や書画に親しんだ。



### 文人士大夫と山水画

文人士大夫は水墨を用いた山水画(自然の景観を表現した絵画)を愛好した。彼らにとつての山水画とは単なる風景画ではなく、作者自身の精神世界を自然の風景に託して描いたものであった。このため「優れた山水画は高尚な精神・人格から生み出される」という価値観が流布し、文人は表現技法よりも絵画に込められた生氣・気品を重要視していた。

また山水画は、作者の教養・人間性を反映するという性質上、文学や書との縁が深かった。そのため山水画の余白や画巻の巻末には、絵画の内容と関連する詩や文章(「題賛・題跋」<sup>だいさん だいぼつ</sup>)がしばしば書き添えられている。

(小林美桜、上野仁士朗、関信成)

# 2015年度 東京大学 前期 国語

## 第四問 随筆

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★☆☆☆	35分	藤原新也「ある風来猫の短い生涯について」(『動物のお医者さん 第6巻』白泉社文庫に収録)からの出題。文庫版漫画の解説文として書かれたエッセイからの出題であった。	2014年度の第四問に比べると、本問は本文の内容がわかりやすく、受験生にとっても取り組みやすい問題だったのではないだろうか。例年の第四問と比べても難易度は低いため、第四問が苦手という受験生も、積極的に練習問題として活用してもらいたい。 設問ごとに見ていくと、(一)は傍線部中の「悠久」という単語の解釈に少し戸惑うかもしれないが、第四問としては標準的な難易度、(二)は傍線部の解釈に関係する部分が非常に長いものの、粘り強く読んでいけば解答の組み立ては容易な問題であった。(三)では、第四問としては珍しく、指示語の指示内容をおさえ、繰り返し同じ内容を述べる部分をおさえ、解答を作るといふ基本的な読解が問われた。(四)はどのような解答を組み立てるか迷ったかもしれないが、本文に

### 傾向と対策

おける筆者と病猫の関係をおさえ、何に對して筆者が「不思議である」と述べているのかをまとめれば解答が可能な設問であった。

### 解答

- (一) 適切な時期が来ると決然と親離れ・子離れをする猫たちの姿を見ると、古くから続く野生の世界の生き方が今も実現されていることを実感し、安心感を覚えるということ。(77字)
- (二) 短命な宿命にある猫の苦しみを自分が与えたように感じ、その猫に手当てをして、自然と一体化した猫の生息に介入するという失態を再び犯してしまったということ。(75字)
- (三) 醜い病猫の面倒を家でみているのは、自身の無償の慈悲心からではなく、猫が病むという犠牲を払ったことで慈悲心が引き出されたからだと徐々に思い始めていたということ。(79字)
- (四) 猫が筆者に慈悲心を与え、筆者が猫の世話をするという両者の関係の中で、病猫への深い愛情が生まれ、猫の死後、不快なはずの臭気さえも惜しく感じたということ。(75字)

### 本文解説

### 段落解説

#### I 猫の親離れ(第1〜第4段落)

筆者は十数年来、南房総の山中にある家で毎年子猫の誕生とその子離れを見届けてきた。その猫たちには、「野生の掟や本能のようなものが残って」

おり、「ある一定の時期が来ると、とつぜん親が子供が甘えるのを拒否しはじめ」。そして初めは「不安な心許ない表情を浮かべ」ていた子猫も、「いざ自立を決心したとき、その表情が一変」し、「それから何日かのち」には「不意に姿を消している」のだという。そのような猫の親離れに対し、筆者は「親も見事であれば子も見事である」と感じ、巣立っていった子猫のありかを想像すると「こころ寂しい反面なにか悠久の安堵感に打たれる」のだという。

## II 猫の世界への介入（第5〜第13段落）

筆者は、そういった猫たちの姿を多く見てきたが、猫に餌をやった経験は一度しかないという。そのときは釣った魚を猫に与えてしまい、その猫が餌付いてしまったのだが、「その猫も野生の血が居残っている」と見え、ある年の春不意に姿を消した」のだ。それ以降、南房総の地にいる猫たちは「都会の猫と違って自然に一体化したかたちで」自立した猫の世界で生きているのだと筆者は考え、野良猫に餌を与えないようにしてきた。そのような行為は猫の世界への介入であり、「自分の気まぐれと楽しみで猫の世界に介入」して、猫の世界を変容させてしまうことは避けなければならないと筆者は自身に戒めていた。

しかし筆者は「死ぬべき猫を生かして」しまうという「へまをした」。二年前の春のこと、筆者は一匹の野良猫が水仙を生かした盥の水を飲んでる姿を見た。その猫は「遺伝のせいか外見にはあきらかに病気持ち」であり、「一年も生きているのが不思議なくらい」、「あらゆる病気を抱え込んでいるように」見える子猫だった。筆者は、それも「野生の掟にしたがって」短い寿命を与えられているのだから、手を貸すことはよくないと考えていた。ところがその猫が、水を飲んで数分後に「七転八倒で悶えはじめた」。筆

者は「一瞬、死期がおとずれたのかな」と考えたが、猫が水仙を生けた水を飲んでいた情景が筆者の頭を過った。もしかすると、トリカブトや彼岸花のように水仙にも毒素が含まれており、水仙を生けた盥の水も有毒なものに変わっていたのかもしれないといったことを思いめぐらせていると、「間接的にその（Ⅱ猫の）苦しみを私（Ⅱ筆者）が与えたような気持ち」になり、「せめて虫の息の間だけでも快適にさせて」やろうと、「つい猫を家に入れてしまった」。

こうして筆者は、猫の世界に介入してはならないと自戒していたにもかかわらず、苦しむ猫を家に入れて手当をってしまったことで、猫の生き方のシステムに介入してしまったのである。

## III 筆者と病猫の関係（第14〜第19段落）

筆者が助けた病猫は、「再び息を吹き返し」て、そのまま筆者の家に居着いてしまった。筆者のもとを人が訪れると、不快な臭気を放ちながら家の中を汚して歩く病猫を見て、多くの場合、「よくこんなもの（Ⅱ病猫）の面倒をみているなあ」と感心するという。その感心の中には「私（Ⅱ筆者）のボランティア精神に対する共感の意味も含まれている」が、筆者は病猫の面倒を見ているのは、ボランティア精神からではないのだと感じ始めていた。

「およそ生き物というものはエゴイズムに支えられて生きながらえていると言っても過言ではない」と筆者は言う。「生き物の関係性が存在する限り完璧な無償というものはなかなか存在しない」のである。筆者は航空機事故で自分を犠牲にして他者を助けた人の例を挙げ、彼も教義を遵守することによる「冥利」（Ⅱ見返り）に「まったく触れなかったとは考えにくい」という。

筆者は「そういうものと比較するのは少しレベルが違う」と前置きしつ

つも、筆者と猫の間にも無償ではない関係性があつたのだという。つまり、「その猫は自らが病むという犠牲を払って、他者に慈悲の心を与えてくれた」ということである。筆者が病猫の面倒を見ていたのも、無償の慈悲心やボランティア精神からではなく、猫によって筆者の中の慈悲心が引き出されたからなのである。筆者と病猫の関係の中に、そのような「輻輳した契約」が結ばれることで、「誰が見ても汚く臭いという生き物(＝病猫)」をどんな生き物よりも可愛いと思うようになるのである。

その病猫は、それから二年間生き、ついに息をひきとつた。猫の死後、「誰もが不快だと思ふその臭気」がなくなつたときに、筆者は不思議と、その臭気すらも「愛しく思い出され」たのだという。筆者と猫の間の関係性と、そこで育まれた「他のどの生き物よりも可愛い」と思ふ愛情は、それほどまでに深かつたのである。

**百字要旨**

筆者は猫の世界への介入を自戒しつつも、醜い病猫を助け、家で飼いつづけていた。病気の猫によって筆者の慈悲心が引き出され、猫の死後、不思議とその不快な臭気さえ愛惜されるほど、筆者は猫へ深い愛情を抱いていた。

(100字)

**用語解説**

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

**心許ない**

① 待ち遠しくて心がいらいらしている。

② 物足りず、不満に思われる。また、不安である、気づかわしい。

③ おぼつかない。あるかないかの程度である。

悠久 長く久しいこと。果てしなく長く続くこと。

へま まのぬけたこと。気のきかないこと。また、失敗すること。  
 湿瘡 ↓ 疥癬 疥癬虫(ヒゼンダニ)の寄生によって生じる伝染性皮膚病。  
 指間・腕および肘関節の内側、腋の下。下腹部・内股などを  
 侵し、ひどくかゆい。しつ。ひぜん。湿瘡。

七転八倒 ころげまわって苦しみもだえること。

エゴイズム 利己主義。自我主義。自己中心主義。

敬虔 うやまいつつしむこと。特に神仏に帰依して、つつしみ仕えること。

冥利 ① 善業(ぜんごう)の報いとして得た利益。

② 神仏が知らず知らずのうちに与える恩恵。冥加の利益。

③ ある立場・境遇でしぜんに受ける恩恵や幸福。

④ 誓いの詞。反すれば冥利を失うのも差し支えないの意。

輻輳 方々から集まること。物が1カ所にこみあうこと。

**設問解説**

(一)

**解答** 適切な時期が来ると決然と親離れ・子離れをする猫たちの姿を見ると、古くから続く野生の世界の生き方が今も実現されていることを実感し、安心感を覚えるということ。(77字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型十具体化型

解答範囲 I (第1〜第4段落、特に第2〜第4段落)

**解説**

まず、傍線部の前後を読み込んでいくと、南房総の屋根裏で毎年生まれる子猫たちの、「野生の掟」や「本能」に従った親離れがどういったものであ

るのが述べられている。そして、筆者は姿を消した子猫のことを思うと、「なにか悠久の安堵感のようなものに打たれる」のだと述べている。さらに筆者は、その猫の親離れに対し、「見事な親離れだと思う。親も見事であれば子も見事である。子離れ、親離れのうまくいかない人間に見せてやりたいくらいだ」と感嘆している。

猫の親離れ・子離れがどういったものであるか詳しくおさえていこう。第2・第3段落に述べられている通り、「ある一定の時期が来ると、とつぜん親が子が甘えるのを拒否しはじめ」、それによって「徐々に子は親のもとを離れなければならぬのだ」という自覚が生まれる」、そして子猫は、「いざ自立を決心したとき、その表情が一変」し、「それから何日かのちのこと、不意に姿を消している」のだという。このようにして、ある時期が来ると決然と親離れ・子離れする猫たちの姿に、筆者は感銘を受けているのである。

では、筆者の覚えた「悠久の安堵感」とはいったい何であろうか。「悠久」とは「長く久しいこと。果てしなく長く続くこと。」という意味である。「悠久」という言葉に対応するような、はるか昔から受け継がれてきたものについて本文で言及されていないか探すと、第2段落1文目に「野生の掟や本能」とある。こうした野生の世界における生き方というものは、はるか昔から受け継がれてきたものであり、それが南房総の猫たちにも、見事な親離れ・子離れという形で今もなお受け継がれているのである。この生き方が今も実現されていることを、猫の親離れ・子離れを見て実感したときの安心感こそが、筆者の覚えた「悠久の安堵感」であると考えられる。

以上の内容から解答をまとめると、「適切な時期が来ると決然と親離れ・子離れをする猫たちの姿を見ると、古くから続く野生の世界の生き方が今も実現されていることを実感し、安心感を覚えるということ」となる。

#### 《解答要素》

- ① 「適切な時期が来ると決然と親離れ・子離れをする猫」
- ② 「①から、古くから続く野生の世界の生き方が今も実現していることを実感する」
- ③ 「②に対して安心感を覚える」

#### 《参照箇所》

- ① 第2段落1文目
- ② 第2段落1文目、第4段落1文目（傍線部）

(二)

#### 解答

短命な宿命にある猫の苦しみを自分が与えたように感じ、その猫に手当てをして、自然と一体化した猫の生態に介入するという失態を再び犯してしまったということ。(75字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 II (第5〜第13段落)

#### 解説

傍線部の直前に、「ところが私は再びへまをした」とあることから、傍線部にある「死ぬべき猫を生かしてしまった」ことは、筆者にとって何らかの失態であったことがわかる。さらに前にさかのぼってみると、筆者は過去に野良猫に餌をやって、その猫が餌付いてしまった経験から、野良猫の世界は「自然と一体化したかたちで彼ら(野良猫たち)の世界で自立している」と考えるようになり、「自分の気まぐれと楽しみで猫の世界に介入」して「猫の生き方のシステムを变形」させてはならないと、自分に戒めていたことが述べられている。つまり、猫の世界に介入してはならないと考えていたにも

かわらず、「死ぬべき猫を生かして」、猫の世界に介入してしまったことが、筆者にとつての「へま」だったのである。また、筆者は「再びへまをした」と述べていることから、このような失態を犯すことが二度目であるということもおさえておきたい。

次に、「死ぬべき猫を生かしてしまった」とは具体的にどういうことなのか考える。傍線部の後ろを読み進めていくと、「あらゆる病気を抱え込んでいるように見え」る一匹の猫が、筆者が水仙を生けた盥の水を飲んでいただけという内容が続く。筆者はこの猫に対して、「野生の掟にしたがってこの猫は短い寿命を与えられているわけだから、私(＝筆者)がそれに手を貸すことはよくないことだと思」っていた。しかし、猫が盥の水を飲んだ後苦しみ始めたとき、筆者は水仙の球根に毒素が含まれており、それによって盥の水も有毒なものになっていたのではないかと思い、「間接的にその苦しみを私(＝筆者)が与えたような気持ちに陥った」。そして、「虫の息の間だけでも快適にさせて」やろうと、猫に手当てをしたのである。つまり、**短命な宿命にあったはずの病猫の苦しみを自分が与えたかのように感じ、猫に手当てをしてしまった**ことが、「死ぬべき猫を生かしてしまった」という部分の具体的な内容なのである。

以上のことを踏まえて解答をまとめると、「短命な宿命にある猫の苦しみを自分が与えたように感じ、その猫に手当てをして、自然と一体化した猫の生態に介入するという失態を再び犯してしまったということ」となる。

### 《解答要素》

- ① 「猫の苦しみを自分が与えたかのように感じた」
- ② 「①から猫に手当てをした」
- ③ 「②の猫は短命な宿命にあった」

- ④ 「②③によって(筆者は)自然と一体化した猫の世界に介入してしまつた(失態)」
- ⑤ 「④のような失態を犯すのは二度目である」

### 《参照箇所》

- ① 第12段落7文目
- ② 第13段落1文目
- ③ 第10段落1文目
- ④ 第5段落6文目
- ⑤ 第6段落1文目

(三)

**解答** 醜い病猫の面倒を家でみているのは、自身の無償の慈悲心からではなく、猫が病むという犠牲を払ったことで慈悲心が引き出されたからだと徐々に思い始めていたということ。(79字)

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 要約型＋指示語説明型

解答範囲 Ⅲ(第14～第19段落、特に第14～第17段落)

### 解説

傍線部中に「それ」「そういうこと」という指示語があることから、まずはこの指示内容をおさえる。傍線部直前を見ると、「ときに人がやって来たとき、この痩せ猫を見てよくこんなものの面倒をみているなあとだいたい感心する。その感心の中にはときに私のボランティア精神に対する共感の意味も含まれているわけだが」とある。筆者が手助けし、息を吹き返した後も家に置いていた病猫は、「家の中にあまり芳しくない臭気を漂わせながら、あたりかまわずよだれを垂らし、手からは血膿の判」を押しまわす「よう

な猫であり、そんな猫の世話を見ていることに対して来客は感心したのである。ここから、「それ」の指示内容は「筆者が」醜い病猫の面倒を家でみていることであり、「そういうこと」の指示内容は「病猫の面倒をみているのは」筆者のボランティア精神からであることとであるとわかる。

ここまでの内容で、「筆者が醜い病猫の世話を家でみているのは、筆者のボランティア精神からではないということ。」という解答が組み立てられるが、はたしてそれで十分な解答といえるだろうか。

第15・第16段落にかけて、生物はエゴイズムに支えられて生きており、生き物の関係性が存在する限り、「完璧な無償」といったものは存在しえないと述べられている。

それを受けて、第17段落に「私が病気の猫を飼いつづけたのは他人が思うような自分に慈悲心があるからではなく、その猫の存在によって人間であるなら誰の中にも眠っている慈悲の気持ちを引き出されたからである。」「その猫は自らが病むという犠牲を払って、他者に慈悲の心を与えてくれたということだ。」とある。つまり、筆者が病猫の面倒をみていたのは、「猫が病むという犠牲を払ったことで、筆者の中の慈悲心が引き出されたから」だということである。

また、「〇〇はAではなくBである」という文章があったとき、筆者が伝えようとしている最も重要な内容は「〇〇はBである」とことであり、「Aではなく」という部分は、「Bである」ということを強調するために書かれた部分に過ぎない。そのため、この設問においても、「Bである」の要素に当たる内容をおさええていない解答は、不十分なものとなってしまっただろう。

以上の内容と、第15～第17段落にかけての「無償」と「犠牲」の対比構造を踏まえつつ解答をまとめると、「醜い病猫の面倒を家でみているのは、自身の無償の慈悲心からではなく、猫が病むという犠牲を払ったことで慈悲

心が引き出されたからだと徐々に思い始めていたということ。」となる。

#### 《解答要素》

- ① 「醜い病猫の面倒を家でみている」
- ② 「①は筆者の無償の慈悲心からではない」
- ③ 「①は猫が病むという犠牲を払ったことで（筆者の）慈悲心が引き出されたからである」
- ④ 「②③のように筆者は徐々に思い始めた」

#### 《参照箇所》

- ① 第14段落6文目
- ② 第14段落7文目、第17段落1文目
- ③ 第17段落1文目、2文目

#### (四)

**解答** 猫が筆者に慈悲心を与え、筆者が猫の世話をすると両者の関係の中で、病猫への深い愛情が生まれ、猫の死後、不快なはずの臭気さえも惜しく感じたということ。(75字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型+理由説明型

解答範囲 Ⅲ(第14～第19段落、特に第17～第19段落)

#### 解説

傍線部中に「その臭気」という指示語があることからその指示内容を追うと、「あの肉の腐りかけたような臭気」「誰もが不快だと思うその臭気」のことを指しているとわかる。これは筆者が家で面倒をみていた病猫の臭気のことである。傍線部では、筆者はその「不快なはずの病猫の臭気さえも」愛し

く思い出されることに対して、「不思議なものである」と言っているのである。

さて、筆者はなぜ病猫の不快な臭気さえも愛しく思うようになったのだろうか。第17段落を見ると、「誰が見ても汚く臭いという生き物(＝病猫)が、他のどの生き物よりも可愛いと思いはじめるのは、その二者の関係の中にそういった輻輳した契約が結ばれるからである。」とある。「そういった輻輳した契約」とは、その前までで述べられている、「猫が病むという犠牲を払って筆者の慈悲心を引き出し、慈悲心を引き出された筆者は家で病猫の面倒をみる」という、病猫と筆者の間にある関係性を称したものであると考えられる。

ここまでの内容をまとめると、「猫は(病むことによって)筆者の慈悲心を引き出し、筆者は(引き出された慈悲心から)猫の面倒をみるという関係の中で、(病猫が何よりも可愛いと思う)深い愛情が筆者の中に生まれていた」ということになる。この病猫への深い愛情があったからこそ、筆者は病猫の死後、不快な臭気さえも不思議と愛しく思い出されたのである。

以上の内容から解答をまとめると、「猫が筆者に慈悲心を与え、筆者が猫の世話をするという両者の関係の中で、病猫への深い愛情が生まれ、猫の死後、不快な臭気さえも惜しく感じたということ」となる。

#### 《解答要素》

- ① 「猫が筆者に慈悲心を与え、筆者が猫の世話をするという関係」
- ② 「①の中で病猫への深い愛情が生まれる」
- ③ 「(①②を前提として)猫の死後、筆者は不快な臭気さえも惜しく感じた」

#### 《参照箇所》

- ① 第14段落6文目、第17段落1文目、2文目

- ② 第17段落3文目
- ③ 第19段落1文目

(小島朋朗、千代田麻理、丸岡賢人)